

歩 & 目 定ラテス

Vol.91

したま とうだ
舌間と合田、海べり集落の探訪
(八幡浜市)

岡崎 直司

タウンツーリズム講座主宰・
近代化遺産活用アドバイザー

八幡浜市中心部から南へ約10分ほど車を郊外に走らせると、小さな峠越えで海沿いの集落に出る。そこが舌間という地区で、次の合田地区と併せて舌田という総称もある宇和海に西面したエリア。続いて川上地区(川名津と上泊)、真穴地区(真網代と穴井)と南に続くのだが何れも屈曲の多いリアス海岸を国道378号線が走り、辺りはどこも段畑のみかん園地である。まさに山本コウタローとウイークエンドの「岬めぐり」を口ずさみたくなる、と言えば歳が分かるが。

さて、舌間地区を少し探訪してみよう。自然石の立派な常夜灯がまず目に付いた。三波川帯に属するご当地特有の緑泥片岩でのつそりと建つその佇まいは、優に3メートルほどもあるうか迫力満点。傍らには現代の常夜灯(街灯)も、踵を返すと目の前に鳥居があり石段の続く一宮神社となる。形の全く異なるアトランダムな石たちをうまく積み合わせ、絶妙な按配で組み込んだ名もなき石工の技は、今はもう絶えて久しい。境内に上がると海が眺められ、立派な宇和海石(砂岩)の玉垣には福岡利吉銘が多く見られる。聞けば、福岡家は醸造業で栄えた家で特定郵便局を併営していた旧家との事。小さな集落の舌間だが、飾り瓦の賑やかな社殿を見る限り、きっと出船入り船ある程度栄えた頃もあったのだろう。



一旦集落に下りて細い路地を抜け、行きたい所があった。その昔、左氏珠山(1829~1906)という漢学者が居て、その生誕地碑のある場所へ。その高寿庵のある位置は、やはり港が眼下に眺められる高台にあった。今も卯之町に残る開明学校(国重文)の元となった申義堂が明治2年に出現するが、その契機となった宇和独特の郷校教育は彼の教育の賜物なのだ。しかも数奇な運命であるのは、晩年期に松山中学で教鞭を執る際にそこへたまたま夏目漱石が赴任し、後に出世作となった小説坊ちゃんに登場する漢文の老先生、それが珠山だったという事になる。ただ、漱石が「坊ちゃん」を発表した明治39年(1906)には、当の珠山はもうこの世には居ない。その10年前に彼は何故か宇和島で凶刃に倒れるという劇的な末期を迎えている。(※1)その事を果たして漱石は知っていたかどうか。また、多少今と違っていたとしても、珠山も見たであろうここからの穏やかな風景を眺めつつ、そんな感慨ひとしおの時を過ごすことが出来た。

続いて合田地区を歩く。こちらは、まだ少しばかりの平地に恵まれていた舌間と違い、全くの斜面地に肩を寄せ合うような家並みが所狭しと並ぶ。やはり周囲は柑橘園地



(※1) 詳しくは「『坊ちゃん』の漢学者はなぜ殺されたか」青山淳平著(郁朋社)参照。

で、山の傾斜に沿って様々な石垣が組みまれ、その間を迷路の如き路地が縦横に這っている。地元の人でない限り、どこへ出るかは皆目分らない。失礼ながら、そこがワタシ的には面白く実にはラビリンズ。今回も様々な発見の連続でもとも紙面が足りそうには無い。行ける所までいつてみよう。

まず直ぐに気づくのが、石垣のアチコチに道路改修か何かのモルタルで囲んだ表示があること。この地区独特の慣例なのか、ささやかな先人の功績が記され、探訪者には心地良い歴史観が味わえる。民俗学者宮本常一の言う「記録されないものは記憶されない」という形を地でゆく感じ。水場へと誘われる青石の石段があったり、狭小な敷地を少しでも有効利用する



べく石垣の天端石を張り出し加減に積むのは至る所で見受けられる。こうしたつましい努力の細やかな暮らしぶりも、モノ余りなグローバル経済での昨今ではとうに失われた美德なのかも知れない。そう言えば「つましい」という言葉自体も若い人にはきつともう死語に違いない。更に歩くと、小さな小屋のような佇まいの建物に出くわした。煉瓦で組まれた焚き口を見ると、どうやら別棟仕立ての風呂場ようだ。田舎に行くとき昔はよく見かけたモンだが、火を使う浴室は母屋内ではなくこうして外に建てられる場合が始まった。なお微笑ましいのは窓の在りよう。これは、壁が傷んで落ちたのではなく(下部はそうだが)下地窓という手法で、粋な窓の形。下地である小舞竹をそのままに壁を抜いて換気窓とした訳で、これが進化すると茶室の窓になる。これもまた多く周囲に見受けられたから、近くに得意な左官職人が居たのかも。次いで驚かされたのが、二階建ての倉庫仕立て壁面の模様。「なんじゃ、コリヤ。」の世



界である。戦争末期の日本はどこかオカシクなっていたようで、当局の指示により全国の白壁という白壁が黒く塗り込まれた。都市部のビルと言わず田舎の土蔵と言わず、それこそ塗らなければ「非国民」のレッテルを貼られる。勿論空襲除けの迷彩を施す指令なのだが、これで戦争に勝てる訳はない。でも国中が本気で塗りつぶされていった。で、この場合はこんなである。何だか妙に救われるというか、庶民の屈託のないユーモアというか、戦時にあつてだから黒でも日章旗なのだが、いやはやナイスアイデア。

そして最後にもう一つだけ。海が見下ろせる位置の一宮神社に大正六年の「庵改築記念碑」がある。その裏面に寄付者銘が刻まれていて、いきなりトップの拾円に別府大川ミツの名が。彼女は別府の港そばで伊予屋旅館を経営した女傑で、そこはこちらから商いで渡る行人の定宿として繁盛した。他にも愛媛屋、うわじま屋、あるいは別府を一大観光地へと牽引した油屋熊八(宇和島出身)の亀の井ホテルなど、かの地は伊予人で発展した感がある。そうした宇和海を歩き来した経済を俯瞰しながら元の小道を下り、今日の名残惜しい探訪を終えた。

